

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)＋(Enterキー)です。〕

自己 外部	項 目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	運営理念を確認し合い、迷った時は原点にもどり、振り返るよう努めている。	玄関に入ると額に入った運営理念が目に入る。来訪者にも分かり易い内容となっている。事務所にも掲示されており職員はそれを目にしたり読むことで自らの姿勢を正している。職員会議で話し合いや確認が行われており、理念の周知徹底が図られている。理念にそぐわない言動がある場合は管理者がその場で注意を促しているが本部のマネージャーから指導を受けることもある。職員は自分の言葉で理念を語ることが出来た。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	防災訓練、催し物などに参加している。民生委員さんの定期的な訪問もある。	開設して6年半が過ぎ、地域や村民、公共機関関係者等にも当ホームが知られるようになり「大地さんね」と親しく交流できるようになってきた。職員のみであるが地区の防災訓練、草刈りにも参加し、文化祭には利用者の作品を出品している。民生委員が敬老のお祝いを届けに来訪している。各種楽器演奏(オカリナ、津軽三味線、大正琴、アコーディオン等)、落語や踊り、民謡等のボランティアが毎月交替で訪問し利用者と交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	実習生の受け入れを引き続き行い、自立支援センター及び社協とも協力しながら地域の人々の理解に努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	役場・民生課、自立支援センター、社協、交番、民生委員の方々をメンバーに迎え、意見・要望を取り入れるよう努めている。	家族には開催通知をお知らせし参加を募り出席頂いている。利用者も参加することがある。会議ではホームの現状報告後、参加者と意見交換をしている。村関係者や住民代表の方からの情報を得て、利用者も地域行事に参加している。ホームが集落と離れた所にあるため防災訓練にも地域住民の参加・協力をお願いしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	自立支援センターや社協と情報を交換しながら連携に努めている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関の施錠は夜間のみとし、身体拘束をしないケアについて職員会議で再確認をしている。	身体拘束に関する研修は毎年行われており拘束に頼らないケアの実践に努めている。玄関にはチャイムもなく来訪者は玄関の引き戸を開けて「ごめん下さい」と声を掛けています。利用開始から間もない方が夕方になると外に出たがるが職員が付き添っている。荷物を持って「一人で帰る」という方には「どうぞ」と声を掛け、自由に外出してもらいながらそっと職員が後から見守っている。下肢がベッドから下がることで障害が生じるため(医師の勧め)、夜間のみベッド柵を使用する方がおり、本人・家族と同意書を交わし、記録も残している。	

グループホーム大地

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	社内、社外研修にて理解を深め、防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	十分とはいえない。特に成年後見人制度については、研修会参加を増やし、理解していくことが第一歩と考えている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居に当たっては面談を重ね、要望や不安な点を伺い、十分な説明をし理解して頂けるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱の設置や相談窓口を設け、随時対応できるようにしている。家族は面会の際、直接話をし、個々に対応することが多い。	利用者の三分の二の方が自分の言葉で意思表示が可能である。言葉は分かるが病気で話せない利用者には「はい」「いいえ」を仕草等で意思確認している。家族の来訪は多く、毎日仕事帰りに立ち寄ったり、週末は月に1回以上足を運んでいる。遠方の方は1～2ヶ月に1回見えているが、その間電話での確認がある。意見・要望は来訪時を中心に伺っている。ホームだより「ありがとありがと」に近況報告欄があり、個別に報告をしている。ホームだよりは希望する親族にも送っており、お礼の手紙やハガキも届いている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	法人全体で提案箱を設け、月1回の施設長会議で議論し、反映できるようにしている。	毎月月初に職員会議（PM6時半～8時頃まで）があり運営に関することや利用者に係わるなどが話し合われている。利用者に関しては声掛けの仕方や工夫、改善することなど具体的に話し合い、サービス向上につなげている。職員間の関係は良好で話やすく、相談しやすく、働きやすい職場だと伺った。提案箱が法人の各事業所に設置されており、毎月本部に集められて開封され、施設長会議で提案内容が検討されている。職員の要望が吸い上げられ当ホーム職員の労働条件などの待遇改善が行われた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理マネージャーが、各職員と面談し、意見・要望等を聞き職場環境の向上に努めている。昨年より自己評価制度を導入し資格手当や給与に反映できるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年間計画に基き、全員が研修に参加できるようにしている。会社所有のケアスクールにて、介護福祉士の資格取得に向け、勉強会・講習会等行っている。又、月1回新人研修会も開催している。		

グループホーム大地

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡会の会員として、交流会・研修に参加し交流している。又、近隣のグループホームの集いに参加し、問題点や悩みなどを話し合い、参考にさせてもらっている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	職員会議で話し合い、十分なアセスメントを行い、利用者さんの生活歴・習慣等を考慮しながら、チームケアに取り組んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所に当たっては納得して頂けるまで話し合いを重ね、信頼関係が築けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の生活歴・習慣をふまえ、どのように暮らしていきたいか、そのために必要な支援は何か考え、インフォーマルなサービスも含め対応している。週一回近くの特養に洗濯物たたみのボランティアに参加している利用者もいる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ゆっくり・のんびり・一緒にをモットーに利用者さんのペースに合わせて、買い物・食事作り・畑仕事を協力しながら行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の方には、利用者さんの心理面を支えてもらえるよう、面会や外出などに協力してもらい、職員は日頃の様子を伝え、家族が戸惑わないよう配慮している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	以前住んでいた家の近所の方が訪問してくれたり、地域の行事に積極的に参加できるよう努めている。また、地区ごとの民生委員さんの訪問もある。	新しく入った利用者に近所の方が面会に見えたところ以前から利用していた方とも知り合いであったので久々に話を楽しまれた。民謡ボランティアで来訪した方が利用者の中に昔一緒に働いていた方を見つけて「アレ～、懐かしいな、元気だったかな」と手を取り合って喜んだり、満蒙記念館に来たからといって利用者の知人が訪ねて来たりしている。特養へ洗濯たたみに出かけている利用者に以前ホームの利用者だった人が顔を出し話をしてくれることもある。職員は利用後も地域の人達とふれあい、また地区行事に参加しながら慣れ親しんだ人とふれあったり、馴染みの場所へ出かけられるよう支援している。	

グループホーム大地

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個性を尊重しながら、気の合う仲間作りができるよう、工夫・配慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所された後も面会に行き、様子を伺っている。 又、家族からの相談もあり、退所後もより良い介護を受けられるように支援している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の要望・希望を受容し表現が困難な方には多様な声掛けをして、要望を引き出せるよう工夫している。	一人ひとりが自分のしたいことをしながら日々、ホームで暮していることに満足が得られるよう思いや意向の把握に努め、その思いが叶うよう職員は支援している。利用者は刺し子や雑巾縫い(糸通しは職員)をしたり、職員と一緒に特養へ洗濯たみに出かけたり、畑の草取りや収穫、干してある洗濯物に触り「乾いているよ」と取り込んで畳んだりしている。多くの利用者は意思表示が可能であり、自分のやりたいことを職員に伝えることが出来ている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人・家族からの情報、前施設からの情報をもとに、その人にあったケアを見だし、実践できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人の生活リズムをアセスメントを通して把握できるよう努めている。現状に変化があった時は、サービス担当会議にて検討し、現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	長期目標6ヶ月、短期目標3ヶ月をめぐり、モニタリング・アセスメントを行い、現状に即した介護計画を作成している。	利用者本人の暮らしがよりよいものとなるための介護計画を計画作成担当者が職員の意見などを聞きながら作成し定期的に見直しを行い、現状に合わせて修正や新たなものに作り変えている。サービス担当者会議ではその日の勤務者が集りプラン内容を検討している。身体状況が大きく変わり全てにおいて介助が必要となった利用者については家族から介護に対する意向を伺い、本人が安心して食事、排泄等の支援が受けられるように作り変えている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の話したこと、行動を記録に残し職員間で話し合いながらケアの実践、介護計画に結びつくよう努めている。		

グループホーム大地

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生れるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族・医療・ボランティアの人たちとの協力を得ながらその時のニーズに対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	広報などを利用し、催し物や行事に参加できるよう支援している。近くの施設に職員と一緒にボランティアに出掛けている利用者もいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	指定協力医院として契約を結び、受診・往診・休日の対応ができるよう支援している。本人・家族の希望により、これ以外の医療機関も受診できるよう対応している。	利用前からのかかりつけ医を継続している。往診に関しては依頼し来ていただいている。月2回看護師の訪問があり、利用者の健康状態を見たり、相談にのっている。通院や受診に関しては家族に付き添いをお願いしているが、本人の状態を医師に伝えるために職員も同行している。歯の治療については必要があれば訪問歯科を受けることが可能となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職はいないが、指定協力医の看護師さんが月2回訪問し、相談・協力してくれている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入・退所時には、医師やケースワーカーと連絡を密にし、特に退所後の生活、医療上の留意点など相談できる関係を築いている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在は終末期ケアの方針について、明文化したものはないが、法人運営の他のグループホームでは看取り経験もあるので参考にしていきたい。	契約時に重度化や終末期に関する事業所の方針を説明し、緊急時の対応同意書を取り交わしている。終末期に利用者・家族が戸惑うことなく安心して迎えられよう家族らの思いに添える支援に努めている。本人や家族にその意向があり医療行為が必要ない場合には最期まで受け入れるとしている。終末期を過ごしながら医療機関に移り最期を迎えたケースがある。入院中の本人をお見舞いに行った時、看護師から「良く見ていたね」と声を掛けられたという。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年1回救命救急講座を受講している。又、避難訓練を日中と夜間帯に分けて、行っている。		

グループホーム大地

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域の防災訓練に参加し入所者の情報を提供し、協力をお願いしている。 避難訓練は日中と夜間と分けて行い、職員は持ち場、役割分担を決めている。」	年2回昼・夜想定 of 災害訓練を消防署の協力の下、利用者も名札を首に掛けて参加している。避難時には車椅子使用の方が半数を超えるため、身近な家族、地元の協力が必要と考えている。地区消防団長と区の方に利用者の身体状況を毎年報告している。9月16日、台風で阿智川氾濫の危機のため、急遽、利用者や職員の家族、警察署員の応援を受け、社協の建物まで40分掛けて避難し、和室を使用することができた。冬には緊急連絡網を予告なしに廻し職員の集合訓練も計画している。消防団が巡回し消火器の点検もしていただいております、期限切れであれば入れ替えをしている。	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人の個性、人格を尊重し接する態度・言葉使いに留意しながら対応できるよう心掛けている。	昔の思いや職業を意識し誇り・自慢として言葉の端々に出ることがあるので記録に残し共有している。一人ひとりの人格を尊重し誇りや本人の気持ちに寄り添いながら支援している。利用者の声掛けは名前に「さん」を付けている。苗字や名前ではなく反応のいい「お父さん」と呼ばれている方もいる。秘密保持の厳守と個人情報保護についての研修を受け、職員は十分に理解している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	常に待つ姿勢で接するよう心掛け、職員の思い込みや、せかす言葉使いはしないよう留意し、本人の意思決定を促すよう対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人のその日の気分や体調を考慮しつつ、ドライブや買い物など希望に添えるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分で選べる人は好みに選んでいただいている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜の下ごしらえは、声をかけて一緒に行っている。食器洗いは進んで行ってくれる利用者さんもいて交代でお願いしている。	利用者は食事の準備や後片付けをできる範囲で職員と一緒にやっている。夕食のみ食材配達サービスを利用している。介助を受ける利用者も自力摂取の利用者も職員と一つのテーブルを囲み、並んだ料理を話題にしながら和やかに食事をしている。そうめん流し、五平餅作りなど季節の料理も楽しんでいる。ホームの菜園で収穫した野菜や家族からの季節の野菜も届き食卓に彩を添えている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	バランスの取れた食事ができるよう一週間単位で献立を立てている。一日あたりの水分量を記録し、好みの物が摂れるよう工夫している。		

グループホーム大地

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	全員が毎食後の口腔ケアをしているわけではないが、できるだけ自分で行えるよう支援している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中は布パンツを基本とし、本人の排泄感覚が鈍らないよう努めている。 排泄表を使って記録に残し、時間を見計らってトイレ誘導している。	利用者一人ひとりの排泄リズムや仕草を職員は把握しており様子を見ながら声がけや誘導をしている。日中は布パンツにバットで過し、トイレでの排泄を心がけている。夜間はリハビリパンツに夜間用バットを使用している。車椅子の利用者の中には声がけに「ハイ」、「いいです」と返事はあるものの疾患のため全ての介助を受けている方もいる。離床できない利用者は時間でオムツを交換している。夜間ポータブルトイレを使う方もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の記録をとり、一人一人のリズムを把握し、飲食物の工夫をしながら薬の服用も併せて行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	午前・午後問わず好きな時入浴できるよう心掛けている。夕食後は、職員の配置の関係で希望に添えていないのが現状です。	お風呂は毎日準備している。利用者は一日おきの午前か午後、好きな時間に入浴している。「昼間から入れてもらえてこんな贅沢は家にいればできない」と喜ばれている。夏は汗をかき「ザブンと入るかな」と入っている。全介助、一部介助または見守りで入浴できている。面倒臭がり拒む利用者に毎日声を掛けていると、「お風呂に入らせて言うことか」と言い入ることもあるという。今のところ夜間を希望する利用者はいない。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人のペースに合わせて、ご自分の居室やソファなど、好きな場所、好きな時間に休んでいただけるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は処方されている薬について理解しており、症状変化については、速やかに主治医に相談し、その指示を受けている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事や縫い物などに参加してもらい、役割を持った生活ができるよう支援している。 歌が好きな人が多く、皆でよく歌っている。		

グループホーム大地

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節の花を見に行くときは車で出掛けている。 天気の良い日は中庭でお茶や昼食をして外気浴も楽しんでいる。	桜が事業所の南側に何本もあり庭先でも楽しめるが、近くの公園まで利用者をピストン輸送し、花見しながらお昼を食べてのんびり過している。少人数に分かれてアジサイやハナモモなどが咲き誇る名所へとドライブがてら出掛けている。広いウッドデッキで外気に触れながらお茶を飲んだり鮎釣りを眺めたり、秋には事業所を取り巻く里山の紅葉も楽しんでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在お金の管理をしているのは一人のみである。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	親戚・知人などから贈り物があつた時は、出来る限りご本人が電話などで話ができるよう配慮している。電話の使用は自由にできるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	自然の木材をふんだんに使った心地よい館内には、季節の草花が飾られ、台所からは包丁を使う音が聞かれる雰囲気がある。ベランダから芝生のある中庭へ自由に出入りできるようになっている。	玄関に入ると居間兼食堂、オープンキッチンがあり、それを囲むように居室がある。テーブルにはサザンカが飾られ、カサブランカの香りが漂っていた。南側にはウッドデッキと広い芝生の庭がある。室内は床暖房が設置されている。利用者は眺めのいい食堂で調理をしたり、趣味の刺し子や塗り絵をしながらのんびりと過している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールの角にはソファや畳ベンチがあり、思い思いの場所で寛げるよう工夫されている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には、使い慣れた馴染みの家具や家族の写真などを飾り、落ち着いて過ごせるようにしている。畳の部屋で休まれている利用者さんもいる。	居室の入口には本人の個人情報を書かれたひも付きの緊急時用カードが色紙封筒に差し込まれている。中に入るとフローリングで滑らないようにと部分的にカーペットが敷かれており利用者は安全に移動できている。壁のボードには利用以降の写真付き誕生カードが貼られており本人の年毎の移り変わりを確認することが出来る。家族の写真や思い出の写真も飾られている。どの利用者も馴染みの物や大切なものに囲まれながら安心し、自分の居場所から寝起きできている。満蒙開拓記念館が居室から見えると喜んでいる利用者もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	全館バリアフリーの中、各部屋に目印をつけ、トイレ・風呂場など解り易いように表示している。		